

2014. 10. 15

No.185

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

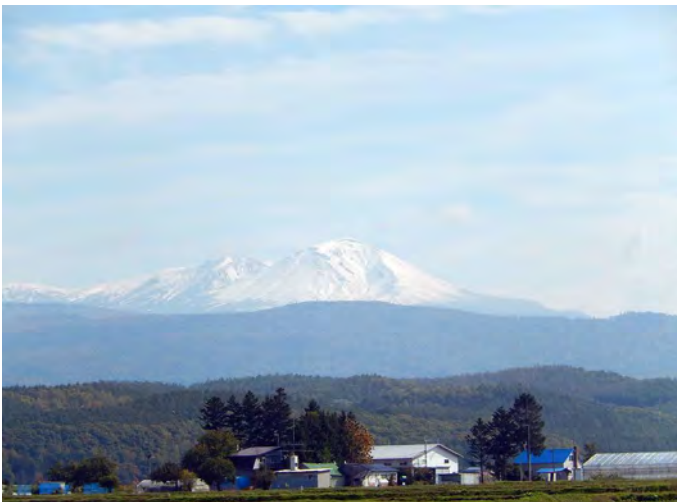
02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



2014.野幌から秋だより

大雪の山々は冠雪し、我が家のリンゴも真っ赤に実りすっかり秋が深まりました。みなさまはお元気でお過ごしでしたか？



10.5 冠雪した旭岳

前号発行から2ヵ月ですが、次から次に押しよせるさまざまな行事に追いかけてられているうちにいつの間にか季節が変わったように思います。

先日は御嶽山の噴火に巻き込まれ登山者56人が亡くなりました。まだ安否が分からない人もいます。亡くなった方たちのご冥福を祈ると共に、原発の近くで噴火したらと思うとゾッとします。4つのプレートがせめぎ合う日本。原発を廃炉にしたいと意を強くしました。

一方的にお送りするばかりの銀河通信に、少しだけ新鮮な空気を入れたいと今まで参加したことがなかったフェイスブックに8月末に仲間入りしました。そこで気が付いたのは、毎日のように発信する人々の多彩な活動でした。写真と短い文章、たくさんの人に知ってほしい脱原発や、平和への取り組みの掲示板でした。ほとんどの方が近況に写真も添えて投稿しているのも驚きでした。スマホが普及していることも気楽に投稿できる要因のようですが、スマホのない私は今まで写真は撮りためてからPCに入れていたのですから、意識改革が必要でした。日常的

に書きとめる習慣を身につけて、銀河通信の編集に役立てたいと思います。

読者のお一人から「アウシュヴィッツ報告会」の提案があり、9月20日に自由学校「遊」で話す機会がありました。銀河通信で書いたことに加えて、集団的自衛権行使を容認してはならないという思いをこめて、アウシュヴィッツで行われた残虐さと狂気を博物館の展示物の写真を使って話しました。小さな会場がいっぱいになり、マイクなしなので伝わるか心配でした。静かに耳を傾けてくださり感謝しています。

9月中旬、銀河通信読者でもある友人からこんなメールを頂きました。「元朝日新聞記者の植村隆さんは、1991年に朝鮮人従軍慰安婦の記事を書いたことで、大手の週刊誌を含め一部のメディアなどからの誹謗中傷、ネット右翼などから様々な攻撃を受けています。そして、彼が以前から非常勤講師をしている北星学園大学にまで、『植村をやめさせろ』という、脅迫が大学に寄せられています。心ある大学の方たちは、植村さんの人権を守り、大学の自治・自主性、学問・教育の自由・自主性を守るため、広くは日本を覆う右傾化に伴う『おかしな空気』、『得体の知れない恐怖』を伴った圧力に抗して民主主義を守ると、頑張っておられます。(略)そこで、大学を応援・激励するメールを、大学HPから書き込んでいただきたいのです」。私もメール読者に転送し北星学園大



10.11江別近郊のぶどう畑

学に「応援メールを送って欲しい」と書きました。その後「負けるな北星!の会」が立ち上がり全国にも支援の輪が広がっています。植村さんのお

話を聞く機会がありましたが、お元気に頑張っています。

10月9日の朝日新聞に「言論の自由を守る、絶対にまけない」と山口二郎さん（法政大学教授、前北大教授）が寄稿されました。「自由を圧殺しようとする者を許さないという決意を持つことが何よりも必要だ」と訴えました。その日に私はFBに山口さんの記事を投稿しました。23人からシェアがありそれぞれの友人に広がっていきました。「負けるな北星！の会」への手紙は 〒060-0042 札幌市中央区大通西2丁目札幌大通郵便局留め又はメール同会事務局（makerunakai@yahoo.co.jp）へお願いします。

8.22柴山瀧湖畔から望む白山



さる。Oさん夫妻、Fさんとは1年ぶりの再会でした。

翌日の天気予報は芳しくない。Oさんが何度もインターネットで調べて、「午前中はなんとか持ちそうだから富士写ヶ岳に登りましょう」と提案して下さい。

22日、5時起き。近くの柴山瀧湖畔から望む富士写ヶ岳が美しいというので、日の出を見に出かけました。空が明けてオレンジ色に染まる白山と富士写ヶ岳に感動しました。

深田久弥が初めて登った富士写ヶ岳 (942m)

我谷口はダム湖の上に架かる赤い吊り橋を渡って登山口へ。7:45出発。急坂が多く滑りやすい。8:15ようやく鉄塔に着く。ところどころ固定ロープが張られている。

ミズナラの木が連なり平地となるがまたもや急登になり、ロープを利用する。「春はシャクナゲが見事なのよ」というTさんの説明を受けながら、開花を終えたシャクナゲロードを歩く。10:20頂上に。今にも雨が降り出しそうな雲行き。下山を急ぐ。たちまち雨に変わり、雨具を着用し、急な下りをひたすらに歩き登山口に12:00。変化に富みいい山でした。



大聖寺の作家深田久弥が11歳のとき初めて登山を経験し、山の魅力に引き込まれたきっかけになったのがこの富士写ヶ岳です。独立峰であるため山容は際立ち美しい。

みな子の山旅日記

8月21日、台風で天候が不安定な中、石川県加賀市に向けて出発。富山空港～富山駅からのJRで秋田のFさんと落ちあい加賀温泉に。Oさんが迎えに出て下

日本百名山の原点の山です。



急登が続くがブナ林が美しい。



水の神・白山（御前峰）2702m



山容が穏やかで残雪が豊富な白山は高山植物の種類が多いことで知られ、水の神として信仰を集めています。

8月23日、バスに乗車し、20分少々で別当出合に到着。登山口11:20スタート地点から

そこそこに傾斜のある登りだが整備されている。別当谷と甚ノ助谷の二つの谷に挟まれた尾根道を歩き、12:05 中飯場で休憩。昼食としました。標高は1400m。登山道は整備されて歩きやすいが急登が続きます。見晴らしのいい甚之助避難小屋に14:00。白山の隣にある別山（べっさん）が

雄大です。右方向に行くと白山唯一のテント場がある南竜山荘に到着。山荘はきれいで、食事も美味しい。生ビールが格別でした。

夕方から別の棟で山の音楽会がありフォークソングが山の空気に共鳴してステキでした。



満天の星を眺め、翌日の白山に期待いっぱいして就寝。

24日3:30起床。4:30まだ薄暗い中、ヘッドランプを付けて山小屋を出発。室堂をめざします。6:00室堂に着くと激しい雨に変わりました。

(p3に続く)



甚之助避難小屋前(1965m)で後方白山別山(2399m)



6:10 室堂出発。6:50 雨で眺望のない御前峰に立ちました。

帰路はひたすらに歩き別当出合に11:50 花の名山としても知られる山ですがほとんど終わっていたのが残念。信仰の山として多くの人たちに大

事にされてきた山に登れたのが嬉しかった。

4日間の楽しい山旅をサポートしてくださったOさんご夫妻ありがとうございました。



8.24 シモツケソウとヤマハハコ



8.24 エンシオガマ

花パトロールで黒岳～北海岳

6月29日、山仲間と高山植物のパトロールで黒岳～北海岳に登りました。高山植物が素晴らしかったので花の写真を紹介します。



メアカンキンバイ



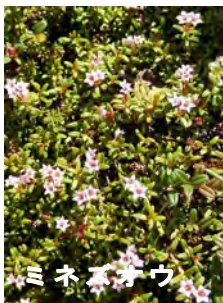
イワウメ



エゾノツガザクラ



キバナシャクナゲとエゾコサクラの群落



ミネズオウ

山のトイレデーで樽前山

9月6日(土)は全道一斉山のトイレデーでした。道内各地の山で「いつまでも美しい山を守ろう」と毎年、啓発活動を行っています。私は樽前山を担当しました。たくさんの登山者でにぎわい、マナー袋や、各地の山域のトイレマップを次々と受け取ってくれました。



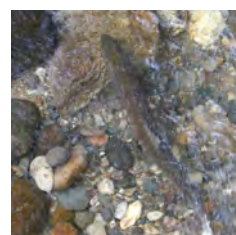
サクラマスを守りたいとサンル川観察会に30人

9月15日、下川のサンル川の観察会に参加しました。天塩川の河口から約200km。こんなに長い距離をサクラマスがのぼってこられる



川は日本ではサンル川だけです。一旦凍結されたサンルダム計画。安倍政権になってから着工が開始されています。素晴らしい自然を子どもたちに残したいと活動しています。

写真は川の生き物を観察する参加者と50歳ぐらいのカワシンジュガイ。



サクラマスがのぼってくるのは清流の証です。



川の生態系を育むサンル川の河畔林

見てきたドイツの原発訴訟と、大飯判決勝訴の意義

日弁連・人権擁護大会の「原発問題」講演から

9.27海渡雄一さんの講演から

私は1981年から30年以上、原子力訴訟と歩んできました。旭化成のウラン濃縮研究所の許可取り消し訴訟をはじめもんじゅ、六ヶ所村核燃料サイクル、浜岡原発、大間原発訴訟です。



ミュルハイムケリと原発の差し止めを決めたドイツ連邦行政裁判所の壁面に彫られた権力を象徴するライオンにかけられた鎖のレリーフ



写真はミュルハイムケリと原発の差し止め判決を出したドイツ連邦行政裁判所裁判所の壁面に飾られていた「鎖に縛られたライオン像」のレリーフです。ライオンは国家権力の象徴であり、それを縛る鎖は憲法です。

「立憲主義」が、しっかりと守られているから、国家に対して原発差し止めの判決が幾つもできるのが理解できました。日本のように差し止め判決を下した裁判官が処遇で不利になることはないことをドイツで知りました。

ドイツの脱原発が倫理委員会で合意が成立した背景にはドイツの裁判所が継続してきた厳格な判断の枠組みがあったからです。

原発訴訟で一番残念なのは、福島を未然に防ぐ機会を逃した浜岡原発訴訟静岡地裁の判決でした。原発の危険性をここまで立証できた裁判はなかったと思います。



勝利を確信していましたが、敗訴しました。

もし、私たちがこの訴訟で勝っていたら、全国の原発について、地震対策が徹底的に強化されて、福島原発の事故はくいとめられた可能性があった、と悔しく思います。

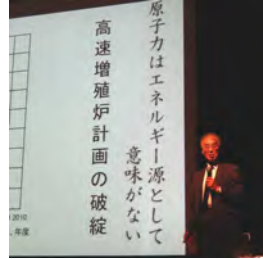
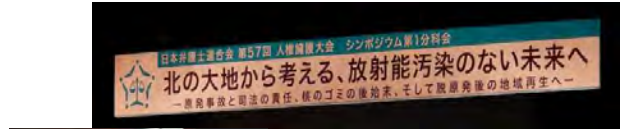
大飯原発差し止め訴訟判決勝訴の意義について「豊かな国土とそこに国民が根を下して生活していることが国富である」とした判示は司法の良心が生きていたということを示した判決でした。福島の事故を経験した私たちは、司法における揺るぎない判断の基準とするだけでなく、行政や立法府にも広めていかなければならないと考えます。泊でも勝訴判決を勝ち取ろうと結びました。

さよなら原発北海道集会

10月4日、雨の中での集会に3500人が参加しました。熱のこもった呼びかけ人の発言と加藤登紀子さんの「愛を耕すものたちよ」の熱唱に感動！



(海渡さん講演会・さよなら原発：撮影・及川文さん)



函館で開かれた日弁論人権擁護大会の「原発問題」シンポジウムには、全国各地の弁護士や市民1500人が参加しました。3人の発言要旨です。

小出裕章さん(京大原子炉実験所)は、福島事故は収束していない。すでに、炉心がどこにあるかわからず、汚染水もあふれ出ている。

「核燃料サイクル」によって生み出されるプルトニウムは、核兵器の原料として転用可能なものである。日本には現在、既に47トンのプルトニウムが蓄積されており、長崎型原爆4000発分を製造することが可能であると言われる。「核燃料サイクル」技術を維持し、「兵器級プルトニウム」を蓄積することは、核兵器を潜在的に保有することに、ほぼ等しい。

増え続けるプルトニウムの対応に迫られた日本が原発でプルトニウムを燃やそうとしたのがブルサーマルだ。原子炉でプルトニウムを燃やすことはやっではない。プルトニウムはウランの何十万倍も毒性が強い。大間原発はプルトニウムを燃やすことを想定した原子炉で、危険が大きいと訴えました。

小野有五さん(泊原発の廃炉をめざす会共同代表)は、日本は使用済み核燃料を17,000トン保有している。政府はそれを再処理して最後に残る

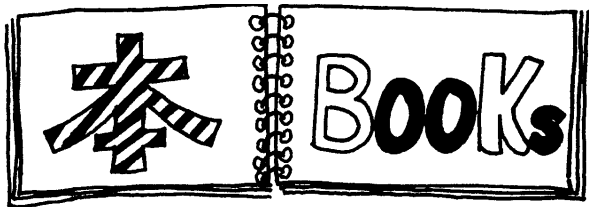


高レベル放射性廃棄物を地下数百メートルに貯蔵する「地層処分」を検討している。原発から取り出した使用済み燃料棒は、もっとも高い熱と放射線をもっており、危険な放射能が安全なレベルに下がるまでには10万年もかかる。しかし4つのプレートのぶつかりあう、世界でもっとも活動的な変動帯の上にある日本列島では、10万年間も、危険な核廃棄物を保管できる場所はない。

20億年前から地震も火山活動も起きていない安定大陸のフィンランドでさえ、10万年の間には巨大な氷河ができたり融けたりして、地盤が隆起・沈降したり、地下水にも大きな変化がある。10万年目は、ネアンデルタール人がいた時代であり、わずか5000年の文明しかもっていない人類が、そんな長い期間、危険なゴミを管理できるということ自体が不遜であると訴えました。

大間原発建設差し止め訴訟について工藤寿樹市長は「海に囲まれた函館では北に避難するしかないが主要な国道は1本しかない。周辺を含む35万人を避難させることは不可能」と指摘しました。

「訴訟は町と市民を守るためにやっている」と発言しました。



響きあう運動づくりを
村田久遺稿集
村田久遺稿集編集委員会編



響きあう運動づくりを 村田久遺稿集

村田久遺稿集編集委員会編
海鳥社 3000円+税

70年代、企業による公害が大きな社会問題になりました。私も学生だった70年代、水俣病に衝撃を受けました。石牟礼道子さんの「苦界浄土」や宇井純さんの「公害原論」に影響を受けた一人です。

私は臨床検査技師として、公害を無くす仕事をしたいと某大企業の産業衛生部に就職。会社の電気製品を作る多くの工場で溶剤に含まれる有害物質の測定をしました。労働者の健康を守りたく、環境改善を要望する報告書を書きましたが全く無力でした。公害対策は「きちんとやっている」という会社の隠れ蓑に過ぎませんでした。その後リターン。病院に職を得ましたが、長い間、公害には大きな関心を寄せてきました。

村田久さん（1935年生まれ）は福岡県香月町に生まれ、10代で谷川雁らの「サークル村」に加わる。三菱化成黒崎工場の労災闘争、指紋押捺（おうなつ）拒否闘争、花崎皋平との「田をつくる」運動に参加するなど、多分野、多地域で活動。2012年、77歳で亡くなりました。本書はその生き方や運動の作り方がよく表れた文章を中心に構成しています。

序文に「村田さんの生涯を知るとともに、労災・職業病、公害を始めとした九州の地域問題をめぐる同時代史を追体験することになるだろう。生きた九州住民運動の記録として、いまなお鋭い問題意識に貫かれた運動論や状況分析を知ることができるだろう。」とあります。

私が驚いたのは膨大なミニコミ誌の発行です。優に20誌を超えています。ミニコミの多くのタイプを打ったのは妻の和子さんでした。腱鞘炎にまでなるほど、タイプを打ち続けたのです。裏方に向いていると思っていた和さんは、マレーシアのブキメラの公害問題に取り組みます。久さんが、今度は裏方に徹するのです。自分の勤務する三菱化成が公害輸出していたことを知り、会社にひるむことなく、ブキメラの住民の訴訟を支援します。和子さんの躍動感のある文章が、私は一番好きです。

さまざまな運動に関わった人々の生き生きとした活動が目に見えるようでした。私も一時購読していた松下竜一さん編集の「草の根通信」も懐かしかったです。

道場親信さんが作成した、詳細な村田久さんの年表と、ミニコミ書誌の一覧から村田さんの足跡の多彩さを知ることが出来ます。全部を読み切るには大変でしたが価値のある労作です。さっぽろ自由学校「遊」<syu@sapporoyu.org>にあります。

紙つなげ！彼らが本の紙を造っている

再生・日本製紙石巻工場

佐々涼子著 早川書房
1500円+税



本書は日本製紙石巻工場が2011年3月11日に被災し、巨大津波で完全に機能停止となっただけでなく、ごく短期間で奇跡的復帰を果たすまでのノンフィクションです。

日本製紙は、出版用紙の4割を担っていたのです。石巻工場の「8号」とよばれる抄紙機は、単行本や文庫本の本文紙を作ります。日本製紙はこの「8号」を、まず半年後に稼働させることを決めるのです。著者は日本製紙社長、工場長、8号機オペレーターの係長、ボイラー担当者、協力会社の社員、組合支部長などに取材を重ねます。従業員が「これは駅伝だと思いました」と語る場面があります。その言葉通り、従業員が一体になって、次々とタスキが渡されて半年後の2011年9月14日に稼働します。

絶対に工場を稼働させるというゆるぎない決意の元、想像を絶する過酷な作業を彼らは続けました。それは「人々の家の本棚に何年も何十年も、所蔵される紙を作っているという誇りから来るものだ」と。

紙はあるのが当たり前だと思っていました。紙を造る人たちがいて本が出来ていることを改めて知り、石巻工場の再建に尽力された関係者の使命感やプライドに胸がジーンとしました。

1冊の本が生まれるまでには編集者がいて出版社があって印刷所そして製紙工場と、多くの人の手を経ることを知りました。そのことを伝えてくれた本書がとても大事に思えました。本好きな方は是非読んでください。



原子力 負の遺産 核のごみから放射能汚染まで

北海道新聞社編 北海道新聞社
1500円+税

北海道新聞連載の「原子力 負

の遺産」をまとめたのが本書です。須藤真哉、関口裕士両記者は、核のごみ無害化のために10年以上も要し、しかもその処理施設の目途も立たない中での再稼働論議に疑問を禁じ得なかったことが連載の発端だと語っています。

処分場誘致に動く北海道・幌延、六ヶ所村の再処理工場、高速増殖炉もんじゅ、そして福島汚染などを、専門家インタビューと共に紹介し、「推進派」を取材対象の中心に据え、実名の記述にこだわり、積み上げた事実で語らせています。記者は原子力に対する「否」の考えを明確にしながら、なお、「答えはあくまで、社会全体で出さなければならぬ」「私情を廃し、深い取材で問題

提起を続けたい」と語ります。

ほとんど知られていない幌延町の「幌延深地層研究センター（深地層研）」についても関係者に取材しています。これは、核のごみと呼ばれる高レベル放射性廃棄物の、処分技術を研究する地下施設。核のごみ処分場にはしない約束で建設・運営されているものの、地元では、なんと原発誘致や処分場誘致の動きもあったと言います。協定の文案を作った元助役は「町民の大半が処分場誘致を支持していた」という証言は驚きでした。

原発に賛成の立場の人たちには、未来への責任が欠け落ちているように思えるのは私だけでしょうか？福島で安全性は否定されたはずですが、日本は使用済み核燃料を17,000トン保有しています。核のごみをどうするのか？課題は山積しています。

本書は私たちがこれからどんな未来を築くのかを深く問いかけています。



3.11フクシマの地から 原発のない社会を！

第二回「原発と人権」全国研究交流集会「脱原発分科会」実行委員会編著 花伝社1200円＋税

過去40年にわたって繰り返し各地で争われてきた原発訴訟。福島第一原子力発電所事故を契機に、それまで各地域でバラバラに争われてきた訴訟の連帯が始まりました。原発差止訴訟のノウハウの蓄積の共有です。脱原発運動は今まさに大きな第一歩を踏み出そうとしています。

本書は福島大学で開かれた全国交流研究集会を基にしたものです。

各地で様々なきっかけで「脱原発」の一步を始めた方々がそれぞれの立場で得た、生の濃密な情報が詰まった本です。

首都圏反原発連合のユニークな抗議集会の継続にはさまざまな工夫があることを知りました。警備の警察官も集会の話聞いていくうちに脱原発になっていったエピソード。脱原発の実現に奮闘する福島の闘い。たったひとりで1000日以上もテントを張って座り込みをしている「さよなら原発！福岡」の男性など。みんな各地で頑張っている姿が臨場感あふれて伝わってきました。出来るだけ忠実に集会の発言を収録しています。

私は毎回、泊原発訴訟の口頭弁論の傍聴をしています。さっぱり進まなくて失望することも多いですが、全国でさまざまな活動をしている人たちの存在を知ると元気が出ました。

HHhH プラハ、1942年

ローラン・ビネ 著／高橋啓
訳 東京創元社 2600円＋税



ナチにおけるユダヤ人大量虐殺の首謀者ハイドリヒ。「金髪の野獣」

と怖れた彼を暗殺すべくプラハに送り込まれた二人の青年とハイドリヒの運命。ハイドリヒとはいかなる怪物だったのか？ ナチとはいったい何だったのか？ 登場人物すべてが実在の人物である本書を書きながらビネは小説を書くということの本質を自らに、そして読者に問いかけます。HHhHとは何のこと？意味のわからないタイトルですが、Himmlers Hirn heißt Heydrich（ヒムラーの頭脳はハイドリヒと呼ばれる）の頭文字だと知り、ミステリー小説のようでした。

ハイドリヒ暗殺の史実を、臨場感たっぷりに追った作品です。狂人ハイドリヒ暗殺計画とその悲劇を、膨大な資料を吟味しながら問いかけます。小説の形をとりながら、ドキュメンタリーのような本でした。

事実のみを描写することに徹底的にこだわっていて前半は正直読みにくい。でも後半は臨場感があり、歴史の現場に居合わせたような気持ちになりました。当時の歴史書とあわせていつかゆっくりと時間をかけて再読したい。ナチに侵されたチェコスロバキア、ヒーローとなった人々、それを匿った人々に思いを馳せると、戦争の悲惨さに胸が痛みます。

私はアウシュヴィッツに行く少し前に事前勉強のつもりで読みましたが、前半の話の展開が複雑でなかなか進まなかったので10日間ぐらいつけて読み終わりました。7月にプラハに行ったとき、ハイドリヒを暗殺した二人のレジスタンス活動家が最後の隠れ家とした聖キリルと聖メトディオス教会の前を通りましたが、中に入ることはできませんでした。いつかプラハに行くことがあれば是非訪れたい。

彼らは教会の地下に隠れていたが間もなくみつき、全員が処刑されました。地下の礼拝堂は公開されており、凄惨な歴史を肌で感じることができそうです。

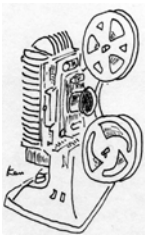
赤い首輪のパロ フクシマにのこして

加藤多一著 汐文社 1500円
＋税



物語の主人公は、食べることが大好きな女の子、ユリカ。地震と津波、そして原発事故が起きて北海道に避難してきたけれど、残してきたばあちゃんや犬のパロが気にかかる。ユリカは放射能汚染やパロの死など厳しい現実と直面しながらも、母と道庁前の抗議行動に参加し、たくましく成長していきます。福島に住んでいていいのかという問いかけを含む物語です。

少女の経験を通して、原発の問題点を描き、自分で考えることの大切さを伝えています。加藤さんの「原発とは共存できない」という思いが心に響きます。



NO

チリ・アメリカ・メキシコ
パブロ・ラライン監督

1988年、ピノチエト独裁政権下のチリ。反対派、賛成派ともに一日わずか15



分のキャンペーン映像合戦が展開します。

政権の信任を問う国民投票で、テレビで「NO」陣営のための宣伝番組作りをフリーの広告マン、レネ（ガエ

ル・ガルシア・ベルナル）が引き受けます。レネは新しい感覚で、楽しい、明るいキャンペーン番組を作り深夜のCMにも関わらず、評判となっていきます。楽観していた政権側は、しだいに形勢の不利を感じ、レネたちを監視、露骨な脅迫が始まります。窓に「マルクス主義者、売国奴」と落書きされたり、息子にも危害が加えられようとしたりします。

両派のCMが当時のまま出てきて時代の雰囲気が変わります。「自由は喜び」と独裁NO！を訴え、血を流さずに政権交代させたCMの力を描きます。

「NO」はさまざまなメディアやネットなどで氾濫する広告、情報に対して、私たちがどう立ち向かえばいいのかわかると暗示しています。今の日本は戦争前夜の状況によく似ていると言われます。私たちが今の政治に「NO」を突きつけるにはこんな方法もありかな？と勇気づけられました。

先日上野千鶴子さんのお話を聞きました。もう一度「平和」を選び直しませんか？と提案されました。簡単に答えは出ませんが、考えさせられました。映画と連動して上野さんが話された「安心して弱者になれる社会を！」「民意を変えて行くことが大事」が心に響きました。「NO」で伝えようとしたことも同じではないでしょうか？

ぶどうのなみだ

三島有紀子監督・脚本

厳しい冬に耐えて雪解けで枝先から落ちるひとしずくがぶ



どうの涙。

北海道・空知。父が遺した小麦畑と葡萄の樹のそばでアオ（大泉洋）はワインをつくり、ひとまわり年の離れた弟のロク（染谷将太）は小麦を育てています。そんなある日、キャンピングカーに乗った女性が、突然ふたりの目の前に現れます。エリカ（安藤裕子）と名乗る不思議な輝きを放つ彼女は、アオとロクの静かな生活に新しい風を吹き込んでいきます。

物語が進んでいくうちに、それぞれが抱える癒しがたい心の傷が明らかになります。土を掘って掘って、アンモナイトを見つけるエリカ。いいワインづくりをめざして土地を掘るアオ。心の傷を超えて夢をかなえようとする姿がステキ。一面に広がる緑色の葡萄畑と黄金色の小麦畑。思わず空を見上げたくくなります。

美味しいワインを研究する大泉洋が宮澤賢治のようでしたし、シンガーソングライターの安藤裕子も不思議な存在感がありました。

ぶどうの涙に、さまざまな思いがこめられているようで、切れていた家族が絆を取り戻していく過程が温かくて清々しい映画でした。



リスボンに誘われて

ドイツ・スイス・ポルトガル
ピレ・アウグスト監督

スイス・ベルンの高校で古典文献学を

教えるライムント（ジェレミー・アイアンズ）は一人暮らし。自宅と学校を往復するだけでした。

身投げしようとして助けた女性が残していった一冊の本。ライムントは本の作者と内容に魅せられて、衝動的にポルトガルのリスボンへ旅立ちます。

その本は独裁時代のポルトガルで反体制運動に関わった医師アマデウが書いたものでした。リスボンで、アマデウやその家族、同志を訪ね歩き、徐々に明らかになっていく、その素顔や人生を知ることによって、ライムントもまた、自らの人生と向き合っていきます。

独裁時代、軍事警察と密告の網が広がり、残虐な拷問が日常的でした。独裁時代と現代が交錯しアマデウと同志の友情や恋愛も描かれます。

1974年のカーネーション革命まで独裁政治が続いたことを私は初めて知りました。映画にも出てくる秘密警察は、ドイツのゲシュタポを模したと言われ、名称は変わっても戦後、革命がなされるまで活動していたことに驚きを覚えました。

リスボンの町並みや坂の石畳、ホテルからの眺望、どれも素敵でした。自由に生きられることがどれほど切実であったかが、反体制運動に身を投じた人たちの思いを伝えて感動しました。

原作はパスカル・メルシエの世界的ベストセラー小説「リスボンへの夜行列車」です。読んでみたい！

プロミスト・ランド

アメリカ
ガス・ヴァン・サント監督

アメリカを揺るがす社会問題を背

景に、主人公が人々との交流により自分の人生を見つめ直す姿を描いたヒューマンドラマ。

広大なアメリカの大地に眠るシェールガスは、国家の経済や財政に多大な恩恵をもたらす天然エネルギーとされていますが、ドキュメンタリー映画「ガスランド」が指摘しているように、水質汚染などの環境面の弊害が懸念されています。マット・デイモンとジョン・クラシンスキーが製作、脚本、出演



を兼任した本作は、本当に住民にとって必要なのか？と問います。

スティーヴ（マット・デイモン）は土地所有者に金をちらつかせ、企業先兵の姿を見せつけて、我が国の原発誘致を想起させます。

環境保護の活動家ダスティン（ジョン・クラシンスキー）は目の前に積まれた金よりも守るべきものがあると訴え、住民たちは将来への不安を抱きながら金か町の未来かで揺れ続けます。

スティーヴはダスティンから“驚愕の事実”を聞かされます。企業がここまでののか？信念を貫き出世街道をまい進し続けて来たスティーヴはついに立ち止まり、大きな決断を迫られます。良心が試される瞬間でした。

大企業が仕掛けたあくどさに震撼とさせられました。



撮影・アキノさん
10.2東村高江でアサギマダラ

アキノ隊員（本名宮城秋乃さん）は昆虫研究者。

沖縄の森林性のチョウの生態研究に人生を

捧げている。沖縄の自然を守るために、昆虫観察会や昆虫教室、写真展などを開き各地の自治体や子ども会から引っ張りだこ。

ガザの虐殺を知って！

パレスチナ・マカドゥマさんの講演



マカドゥマさん（写真提供・北海道民医連新聞）

9月21日、パレスチナ・ガザ地区で医師として国連の現地医療責任者を務めるモハメド・マカドゥマさんの講演会が札幌でありました。主催は北海道パレスチナ医療奉仕団です。

ガザ地区で2,000人を超える市民がイスラエル軍の無法な攻撃を受けて亡くなっています。3割が子どもです。マカドゥマさんは「逃げ場のない中で、人々が攻撃にさらされ、1万8千もの建物が破壊され、10万人を超える人々が家を失いました。イスラエル軍は国が運営する学校や病院も攻撃したのです。イスラエルとハマスの戦闘だとマスコミなどは伝えますがそうではありません。イスラエルによる占領であり、虐殺です」と訴えました。

何の罪もない市民が、犠牲になるのは許せません。なんとか暴力や憎悪を断ち切って対話し、共存できるように願っています。

購読料をありがとうございます（敬称略）
2014.8.15~10.15

佐々木明員（札幌市）京極絃一（札幌市）福田光子（秋田市）及川文（札幌市）佐々木妙子（札幌市）吉根由紀子（札幌市）山本博（福岡市）津村靖代（札幌市）切手 高富拓生（嘉府市）カンパ含む 新妻徹（札幌市）黒尾和久（府中市）カンパ含む 小室正範（札幌市）小野瑛子（習志野市）カンパ含む 大久保フヨ（北広島市）切手 高橋春枝（札幌市）カンパ含む 三島春光（東川町）市根井孝悦（函館市）北原信吉（札幌市）中川路朋子（江別市）カンパ含む合計40,000円と切手60枚は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。郵送読者で2年以上音信のない方は送付を中止します。購読希望のときはお知らせください。

北海道新聞

2014年（平成26年）9月19日（金曜日）



江別市野幌若葉町の主婦で、ミニコミ誌「銀河通信」を発行する樋口みな子さん（65）が20日、7月に訪れたポーランド・アウシュビッツ強制収容所の報告会を札幌市内で聞く。憲法解釈の変更による集団的自衛権の行使容認などで戦後の平和路線が曲がり角にある中、樋口さんは「市民の目線で戦争の悲惨や狂気を多くの人に伝えたい」と話す。

アウシュビッツ 市民の目線で

江別の樋口さん あす札幌で視察報告

学生は「子供の時から繰り返したこの悲劇を学んでいる」と話した。翻つて日本人は過去の戦争を重視してきたのだろうかと同問した樋口さん。「一兵一卒に見る人がこんな蛮行に及んだことを忘れてはいけない」と話してくれた日本人ガイドの言葉に、「だからこそ、私のような普通の市民が見たこと、感じたことを多くの人に伝える意味がある」と報告会を思い立った。

「銀河通信」は1988年創刊。環境問題やハンセン病などの人権問題、太平洋戦争中の沖縄の集団自決問題などを取り上げ、全国規模の機関誌コンクールで優秀賞に輝いたこともある。今年8月の184号ではA4判8ページにわたりアウシュビッツの旅を報告した。

報告会は20日午後2時から札幌市中央区南15西5のさっぽろ自由学校遊一で、参加費500円。問い合わせは「遊一」5252・6752へ。（関口裕士）

⑤報告会で紹介するアウシュビッツの写真の前に話す樋口みな子さん。「若い人たちにこそ悲惨な歴史を知ってもらいたい」
⑥虐殺されたユダヤ人のものとみられる大量の靴（樋口さん提供）

